

オピニオン「オープンカレッジ」

経済学部越智祐子講師の「増える多胎妊娠

～少子社会における育児者たちにエールを～」掲載

●中部経済新聞 2016年10月27日(木)



名古屋学院大学
経済学部講師

越智 祐子

おち ゆうこ 社会学、社会福祉
学。同志社大学大学院文学研究科社
会学専攻博士後期課程満期退学。博
士(社会学)。1972年生まれ。

性という観点からみると、
双子以上を生み育てる多胎
育児者たちは、次世代育成
に積極的に取り組む非常に
頼もしい存在だ。しかし一

少子社会における 育児者たちにエールを

頭が下がる。

ところが、多胎育児を根
拠とする公的な支援制度は
ほとんどないのが実情だ。
医療関係者は、単胎と多胎
で妊娠出産を別のものだと
はつきり区別しているだろ
うが、生まれた後は区別し
なくなる(日常的には双子
に対する「セツト感」を求
めることは多いけれど)。

自治体によって異なるが、
育児支援ヘルパー制度で、
利用できる期間が少し長い
か回数が多くなっているこ
とが公的支援の代表例であ
る。この前提には、1人十
方で、多胎育児者たちへの
社会的な理解や支援は十分
ではないように見える。

「平成16年版少子化社会
白書」によれば少子社会と
は65歳以上人口よりも子
どもの数が少ない社会のこ
とで、日本は1997年か
ら少子社会だとされる。第
2次ベビーブーム以降、单
胎の出生率は一貫して下降
してきた。その一方で、双
子や三つ子などの多胎妊娠
は増加していることを存
じだろうか。多胎は、不妊
治療の普及などの要因によ
つて近年増えている。石川
県立看護大学の大木教授に
よれば、現在は、日本で1
年に生まれる赤ちゃんの
おおよそ2%が多胎児だと
いう。日本社会の持続可能

オーブン
カレッジ

増える多胎妊娠

まどまつた睡眠をとること
が難しく、「記憶がない
(いつ横になつたか、いつ
自分が食事したか、いつ
替えたか….)」という人も
少なくない。赤ちゃんにつ
いては片方ばかりにならぬ
よう、間違わぬように、
一生懸命に授乳や排泄ノー
トをつけている人も多く、

実は岐阜県は、全国の多
胎育児支援のお手本となる
先進県だ。その理由は、N
PO法人「ぎふ多胎ネット」
が、行政の理解と協力を得
てがんばっているからだ。
妊娠から一貫して育児家庭
を支援するために、多胎育
児の先輩が同行し、育児者
の気持ちと身体に寄り添う
「健診サポート」などの事
業が、自治体とのパートナ
ーシップのもとで展開され
ている。

多胎をはじめとする少數
派の育児から少子社会が学
ぶことは多いのではないか
か。父親の関わり方もしか
どう。いずれにしても、
生まれてきた子どもたちを
喜んで、健やかに育む社会
を築くことが必要だ。

1人は2なので、単胎に多
い。単胎とは異なる過酷な
妊娠出産に関して、多胎
は医学的にハイリスクであ
り、单胎とは異なる過酷な
経過をたどる場合も少なく
ない。そもそも多胎に対応
できる産科は限定されてい
る。出産後は、母体が疲弊
しているところへ、あると
きは同時に、またあるとき
は時間差で、赤ちゃんが待
つたなしのケアを求める。
單胎の4倍。三つ子なら3
の自乗で9倍という計算
できる。双子なら2の自乗で
ある。これは少し大げさだと
思われるが、多胎育児者たち
は泣き笑いの体験談を聞く
に、その生活は単純な足し
算ではない。同月年齢の子
ども同士の相互作用が働い
てカオス化する、現実の生
活状況をよく表現している
ように思う。